



ま ま ご と 新 聞

MAMAGOTO NEWSPAPER

発行元：ままごと

FEB 14, 2016 NO.16



「わたしたちは、 息をしている」

柴幸男

25歳のころ、僕は何をしていたか。大学を卒業し、就職し、退職し、半年ほど引きこもり、いよいよ演劇をやらねばともぞもぞ動きだしたころ。未来は見えなかつたけど、不思議と楽しかった。

33歳になった僕は今、三重県で25歳以下の若者たちと演劇を作っています。三重県文化会館が企画したこの「ミエ・ユース」。ユニークなのは、俳優ではなく作り手の育成が目的ということ。だから今回、僕は若者たち全員に劇場作品を作ってもらおうことにしました。

準備は昨年の9月から始まりました。最初に伝えたのは企画も作品であり、企画者も作者であるということ。地方は単純に企画Ⅱ公演が少ない。企画が少ないれば演者も、観客も、劇場も幸福な演劇に出合う確率が減る。だから作者は少ないよりは多い方がいい。もちろん誰もが作者になる必要はありません。しかし人間の特性というものは往々にして自分が意識してないところにあるもの。25歳の僕もそれが全くわかっていませんでした。だから、とにかく全員やってみる。

企画も演出も自前。出演も彼

らが責任を持って自分たちをキャストینگします。もしかしら誰の作品にもキャストینگされない可能性もあります。それもまた自分の特性。どうしても出演がしたいのなら、自分の作品に自分をキャストینگすることもできます。そうやって素晴らしい作品が生まれることもあります。自分は常に選ばれる側であり、選ぶことはできない、というのは思い込み。だから、自分がやりたいことは自分が作る。

企画の後は、全員に戯曲を書いてもらいました。僕がコメントし、何カ月もかけて推敲を重ねました。彼らはほとんどん作者になってきています。

そして、いよいよ本腰を入れて全員が劇場作品を作るときが来ました。

残された僕の仕事は彼らを作った作品を、冷徹に選別し、並べて、劇場作品に仕立てること。その過程で僕の実力をしっかりと彼らに見せること。どんな作品が揃うのかわからないし、どう並べれば作品になるのかもわかりません。でも、この半年間の準備と彼らの成長は今まで体験したことのないものでわくわくしています。

公演名は『わたしたちは、息をしている』。舞台上も、客席も、誰もが息をし、生きている。なぜ若者たちは演劇と関わりたかったのか。この作品を、若者たちの半年間の証明、そして生きている証にしたいと考えています。お楽しみに。

「ままごと」2015→2016

毎年恒例、ままごと新聞年初号での「振り返り&抱負語り座談会」。今年も劇団員全員が一堂に会し、トークを繰り広げました！『わが星』再々演を筆頭に、大きなプロジェクトが多かった2015年。それを経て、2016年のままごとはどこへ行く？

『わが星』から Theater ZOU-NO-HANA への地続き感

——まずは2015年について、それぞれにとって一番大きかった出来事、達成感や新たな発見があった出来事を教えてください。

柴 やっぱ『わが星』ですね。東京公演でどれくらいお客さんが来てもらえるか不安だったんですけど、その目標も達成したり、また小豆島で一から「劇場」を作って上演できたことが大きかったです。実際、企画しながらも「本当にできるのかな」と思ってたんですけど(笑)、劇団と、協力してくれた人たちのおかげで、実現しました。あと、これはTheater ZOU-NO-HANAにも言えることなんですけど、どちらも続けてきたことの集大成というか、初めてではできなかったようなことやコンパクトながら完成度の高いことができて、これまで時間をかけて取り組んできたことが結実した感じはありましたね。

端田 2015年は『わが星』の再々演をさせていただいて……ってこの言い方に尽きるんですけど、実質的なプロデューサー業務

をやらせていただき、でもそれを公表せずにやったことがよかった面と、その分周囲に迷惑をかけた部分があるなと感じています。ただ、乳幼児観劇可能回を実施できたことはものすごくよかったです。これも、言い出したのは私ですけど、スタッフと俳優チームが叶えてくれたというのが私の心境です。あと、小豆島での上演が

きたのも本当によかった。上演に伴い、会場になった小豆島高校の吹奏楽部やギター部、あと希望してくださった先生や生徒とのWSができたことは、今後の小豆島でのままごとの活動につながるができる、よい布石になったと思います。それと、『わが星』のことと小豆島のこと、Theater ZOU-NO-HANAのこと



小豆島高校の高校生たちにも「わが星」を観てもらいました
撮影：濱田英明

が私の中では全部繋がっていて、それぞれが個別に進進したのではなく、関連性を持ちながら発展した部分があると思います。

大石 僕にとって昨年一番大きかったのは、1月にスイッチ総研を立ち上げたことです。スイッチ総研には制作さんがいないんです。だから何かをやるようになった時に、ゼロから公演の終わりまで、全部自分たちでやらなきゃいけない。それを経験したのは大きかったです。特に立ち上げの六本木アートナイトの時は、六本木ヒルズの方や六本木の商店街の方たちのところへ、所長の(光瀬)指絵さんと足繁く通って。最初は怪訝な顔してた方たちに、最初は「やってもらったよかった」と言われたのはよい体験だったなあと思います。

加藤 私にとって大きかったのは『わが星』なんですけど、それについて感じていたことは柴さんと端田さんがほとんど言ってくれました。個人的には、劇団員になって2年目で、制作として人前に立ってやることも増えてきて、ようやく劇団員ですって言うのもいいかなと思えるくらいにはなれたかなと。それによって、

ままごとにかかわってくれる方やままごとの作品を受け取る側の方が大きかったです。そこからまた先につながるような関係性が実感できたり、それを大事にしていきたいなと思います。

宮永 僕は年末のTheater ZOU-NO-HANAが大きかったですね。3年連続で象の鼻テラスで活動させてもらいましたが、アーティストやダンサー、デザイナーなどなど、ジャンルを超えたさまざまな表現活動をしている人たちがあの空間で何ができるかを3年間かけて考えて、それをアウトプットできたのは大きな経験だったのでないかなと。あと、端田さんも言うってましたけど、小豆島のことで、象の鼻テラスのことは地続きだな

と思ってる。どちらの関係とも始まって約3年経ったんですね。これらの活動によって劇団としての活動の幅が広がった感じもしますし、この3年の結果を今年・来年以降にどう繋げていこうかってことを、今ようやく落ち着いて考えられるようになってきたかな、と思います。

柴 確かに2015年だけ見ると特別新しいことを、始めて、はいなくて。メンバーが増えたり、いろんな仕事ができるようになったり、個別の仕事ができるようになってきたりと、新しいことをやっていたのはむしろ3年前なんですよね。でもそうやってちよつとずつ丁寧に形にしていた結果が、2015年の活動だったんじゃないかなと。2016年はもっと、それぞれがそれぞれの活動の幅を広げつつ、次の3年先に向けて、新しい方向性を探していけるようにしたいなと思っています。東京での新作公演の可能性もこれから起こりそうな気がしていますので、そこに向けて動き出すことができれば。

それぞれに準備の年

——では、2016年のそれぞれの抱負や、「自分にとってココが山！」というポイントは？

宮永 まずはこれまで3年間の振り返りをきちんとやりたいのと、これからの3年間を見据えた活動を始めたなということですね。振り返りについては、まず『わが星』のドキュメンタリー



左から大石将弘、宮永琢生、端田新菜、加藤仲葉、柴幸男

映画を作って上映会をする企画を今立てています。それが夏くらいかな？

大石 ドキュメンタリー映画？

宮永 そう、昨年の小豆島公演のバックステージ映像を編集して、その上映会とトークイベントみたいなことをやりたいなど。

あと Theater ZOU-NO-HANA の振り返りイベントを、3月に象の鼻テラスでやらせていただく予定です。個人的に今年メインでやりたいなど思っているのは、「喫茶ままごと」の経営。今年もままごとは、(瀬戸内国際芸術祭の参加団体として)小豆島に滞在して、喫茶店でパフォーマンスを注文できる喫茶店をやる予定で、その会場となる喫茶店を、ちゃんとやってみたいんです。食品衛生責任者の資格を先日とったの



ままごと×ナルテノン多摩「あたらしい憲法のはなし」
撮影＝山口真由子

で、店の経営ってことをやってみようかなと。

全員 へー！

柴 春・夏・秋と、3会期全部小豆島にいるんですか？

宮永 うん。春会期はとりあえず準備期間で、ままごとが滞りする夏会期にはちゃんとカフェをオープンさせたいなど。あとそれと同時に、宿泊型の演劇作品を作りたいとずっと思っているので、地域の宿泊施設と地元で演劇活動している団体や劇場と手を組んで何かできないかなと思っていますね。

加藤 すいいなあ！

端田 私は……じつとしていてとどんどん太っちゃうので、お腹が出てる、もちやもちやとした身体性のおばちゃん俳優になっただほうがいいのか、それともちゃんとシユツとした、こぼちゃんになるのか悩んでて。

全員 アハハハ！

柴 動けますよ、みたいな(笑)？
端田 そうそう、そういう40歳もいるじゃん。そこで今、すっごい迷っています。それが、3月に出演する野上絹代さん作・演出の三月企画と、5月に出演する山内ケンジさんと山内健司さんのWけんじ企画の2本によって、どっちの方向性に行くか、自然と決まるといいな思っています。

全員 アハハハ！

端田 でもね、これたぶん、すごく切実な問題だよ！

柴 そうですよね(笑)。

加藤 私は、今年はまだままごとの仕事がなくて、ちよつと先の仕事の準備をしている感じですよ。

個人的にはこの1、2年ブルドーザー的に走ってきたので、ちよつと自分の中にあるものをきちんと棚卸してみたいなど。あと人にちゃんとものが伝えられるようになりたいので、自分のやっていることや劇団のプレゼンがきちんとできるようにしたいです。あとはこれ、誰にも言っていないことなんですけど……。

端田 何なに？ 好きな人ができた？

加藤 だいいいですけど(笑)、今年はむりかもしれないですが、劇団員の俳優二人が同時に出演する作品がまだままごとにはないので、それをいつかやりたいなど。

柴 いつか(笑)！

加藤 ささつとやれるような作品を……可能だったらぜひ柴さんに……コントを書いてもらい



Theater ZOU-NO-HANAにて上演された「ソウノハナス イッチ」

たいなあって。

端田 コント!?

加藤 コンパクトな演劇がもつとあるといいな思っているんです。「何かやって」と言われたらその場でパツとやることもできる、しつかりとした小作品がいいなって。

大石 僕はままごととナイロン100℃、二つの劇団に入ってますけど、ナイロンは今年本公演の予定がないんです。なので、ままごとの瀬戸内国際芸術祭の公演をまずはがんばります。あとは劇団外に個人で呼ばれる仕事を増やしていきたいです。

柴・端田 スイッチは？

大石 今決まっているのは、2月に下北沢演劇祭に参加することと、夏に愛知県豊橋市でやることです。最近考えているのは、学校とか新聞社とか、屋内でやるのも面白そうだな。大人の社会見学って一時期流行りましたけど、普段入らない場所を貸切にして、スイッチツアーをやるというかなんか思っています。

全員 へえ。

大石 ただ、1年がスイッチだけで埋め尽くされるのは恐怖なので、うまくバランスをとりつつ、屋根のある劇場で俳優として舞台上に立ちたいな(笑)。

柴 僕は……もともと2016年はお休みの年というつもりで、目立った活動をせず、休んだり取材に出掛けたりしようと思ってたんです。が、前々からずっと考えていた、新作戯曲を書き下ろして複数の劇団に同時上演してもらうプロジェクトが、



Theater ZOU-NO-HANA につ。屋外で音楽隊が演奏

どうやら2017年に実現しそうですね。その準備は2016年1年かけてしないとできないような大きなことなので、結局休んではいられなくなってしまうんですけど(笑)、でもすぐワクワクしています。あとは……仕事と家庭の面で、しばらく東京にすることが増えそうなので、あらためて東京の劇場で公演したいなという思いが湧いてきていて。2016年にすぐ、何かをするということではないんですが、これから何が出来るかを今年1年かけて考えていくことになると思います。なので、目に見えて特に変化はないかもしれないですけど、2016年は個人活動を頑張ろうかなと思っています！

象はすべてを忘れない？

象の鼻テラスで2013年から3年間にわたり、Theater ZOU-NO-HANAと題してさまざまな試みを行ってきたままごと。その3年間の歩みを、端田新菜が1年ごとに振り返ります。

神奈川県横浜市象の鼻。
フラリとこの場所を訪れた人たちに演劇とすれ違ってほしくて、Theater ZOU-NO-HANAを3年間作り続けました。

2013年

春から柴くんが何度かのワークショップを重ねて、本番は12月でした。タイトルは、『象はすべてを忘れない』。歌、ダンス、映画、ラジコ、フラッシュモブ「象の思い出」、紙しばい、おさんぽ演劇、遊べる展示、思い出交換所、そしてスイッチ。日々のプログラムは前日に決めて毎日がつづけ本番。窓ガラスにたくさん絵を描いて、遊べる展示の楽器やぬり絵や折り紙もいつも散らかってて、外では旗が風に揺れていて、おもちゃ箱をひっくり返し続けるみたいな毎日でした。

2014年

昼寝を追求したり、晴れを乞うたりのワークショップを経て、やってきました12月。この年に初登場したのは「ゾウノハナたいそう」と「海の見えるKOTATSU」。

「ゾウノハナたいそう」
撮影：本城田

が生まれてその余裕が作品全体にもいい影響を及ぼすはず！と思っただけですが、いや実際蓋を開けてみたら、この年も毎日てんでこ舞いでした。人も増えました。

「スイッチ」に出演する人、「象の思い出」に出演する人、合唱しに来る人、象の鼻テラスのインターの皆さんなどなど、なんかもうすごい人がいっぱいいてすげー楽しかったです。新作は二つ。カフェで行われたランチリーディングと、船で横浜港を巡る「ゾウノハナクルーズ」。そう、ついにわたしたちは、横浜港を離れて海に出たんです！

「ツアー（おさんぽ演劇）」の新作も増え、「3分旅行」や「クエスト」といった、お客さんが一人で楽しめるコンテンツも増えました。ラジコブースと屋台案内所を作ってお客さんへのご案内がしやすくなりました。無料の演劇「象はすべてを忘れない改め象は夜景が見たいぞう」の上演もやりました。確かキャストティングはくじ引きで決めてたような……。夜の「ツアー型スイッチ」も1回だけやりましたね。テラスの外に拡がる作品が増えた印象でした。

2015年

3年間の集大成をやるうってことで、再演を中心にちゃんと事前にプログラムを決めて上演しました。なんで昨年まで毎回前日まで明日やることを決められなかったのか……これで少しは余裕

ミエユースままごとと劇団員によるワークショップ

9月より始まった三重県文化会館による若手限定U25のための企画「ミエ・ユース演劇ラボ」。期間限定の劇団名も「まねごと」に決まり、2月27・28日に「わたしたちは、息をしている」を上演します。

上演に向けた創作ワークショップ（WS）を行う中で、ままごとと劇団員たちもゲスト講師としてWSを行いました。

宮永珠生と加藤仲葉が行った『制作WS』では、企画書・予算書に必要な要素を伝えました。それを基に、まねごとメンバーは三重県文化会館のさまざまな場所を使った企画を立てるワークショップを行いました。

端田新菜が行った『俳優WS』では、端田が普段台本と向き合うときに行う作業を伝えました。いくつかの台本を用いて、メンバーも実際にその作業を行いました。大石将弘の『俳優WS』では、2人1組になり他人の会話を再現するワークショップを行い、その中で、大



大石将弘による「俳優WS」の様子

石が舞台上に立つ際に大事にしていることを伝えました。

また、ままごとと新聞の編集長である熊井玲さんにも特別講師として『編集WS』を行っていただきました。広報として情報をどう扱いますか、どう手渡すかが伝えられました。

そして、WSの後には、柴幸男によるインタビューも。今の仕事についてた経歴やきっかけなど、普段劇団員同士でもあまりすることのない話がたくさん飛び出しました。こうしたWSを経て創り出される「まねごと」の作品、どうぞお楽しみに！
文：加藤仲葉

NEXT

- 第26回下北沢演劇祭参加
- ・スイッチ総研「下北沢演劇祭スイッチ」
- ◇大石将弘「研究開発・出演」
- @下北沢あずま通り商店街周辺
- 2016年2月7日【日】
- ・勝手に！祝！下北沢演劇祭26周年記念
- パルクステージツアー型スイッチ
- 「あなたの知らない本多劇場」
- @本多劇場 2016年2月15日【月】
- http://switch-souken.tumblr.com/

- ミエユース・演劇ラボ2016×ままごと
- まねごと「わたしたちは、息をしている」
- ◇柴幸男「構成・演出」加藤仲葉「制作」
- @三重県文化会館小ホール
- 2016年2月27日【土】・28日【日】
- http://manegoto.tumblr.com
- 北九州芸術工業地帯
- 演劇的工場夜集ツアー「ひかりとけむり」
- ◇柴幸男「作・演出」
- @「かもん」船上
- 2016年3月11日【金】・13日【日】

- www.kitakyu-paifa.com
- 「A DOCUMENTARY of Theater ZOU-NO-HANA」トーク&上映会
- ◇柴幸男・宮永珠生・大石将弘・加藤仲葉【出演】
- @象の鼻テラス
- 2016年3月19日【土】
- www.zounohana.com
- 三月企画「GIFTED」
- ◇端田新菜【出演】

- @のげしゃる
- 2016年3月24日【木】・28日【月】
- www.kinuyo-marchproject.info
- 編集後記
- 2016年の1号目は、2015年を振り返りつつ、2016年のままごとの展望を語る座談会となりました。それぞれの新年に向けた、野望を聞きながら、感心したり爆笑したり、大騒ぎの1時間でした！次号17号もお楽しみに。（熊井）